仕立て屋、会頭に仮縫いの待ち針を打たれたまま潮を噴く

R18

2026・10・14

目次

第01話

第02話

第01話

　小浜はボタン穴をかがっていた。端切れにはさみで小さな切れ目を入れ、そのまわりに糸を巻きつけるようにして目を詰めていく。かがり終えたら糸を歯で切って、次の端切れを取る。縫い子の試験までに、穴の目をそろえられるようになっておかないといけない。帳場の隅には、穴だらけの練習布がもう山になっていた。

「師匠、これ見てください。右の端だけ太っちゃって」

　仕切りの向こうから、小浜が練習布を振った。環は作業場から出てきて、帳場の前で布を受け取った。

「引く指が、針より先に行ってる。針が抜けきってから糸を引けばいい。急ぐと目がつぶれて、穴が口をとがらせたみたいになる」

「口を……あ、ほんとだ。とがってる」

　小浜は笑って、新しい端切れにはさみを入れた。

「試験のとき、目のそろってない穴は、試験官がその場ではさみを入れて切っちゃうんですって。おかみさんたちの前で。私、切られたら泣くかも」

「切られたら、もう一度かがればいい。泣いてると針が見えない」

「師匠はそういうとき、絶対泣かなそう」

「泣くひまがあったら、ほどく」

　店先が急に暗くなった。

表ののれんを、大きな肩が押し上げている。かもいに頭をぶつけないよう、男は背を丸めてくぐってきた。顔は人のものだが、閉じた口の端から下の牙が少しのぞいている。羽織の袖口から出た手の甲には、硬いうろこが浮いていた。太い尾が土間をこすって、乾いた音を立てる。

服飾商会の会頭、巽だ。

小浜が糸をくわえたまま固まった。

「いらっしゃいませ」

「仕事を頼みに来ました。掛けてもいいですか」

「その腰掛けは低いです。客の台にどうぞ」

巽は客の台に腰を下ろした。座っても、頭は立っている環の胸のあたりにある。

「商会で、新しい下着を売り出します。その見本を、この店で作ってもらいたい」

　巽は懐から畳んだ紙を出したが、開かずに膝へ置いた。

「今の下着は、腰に布を巻いて余りを前で押さえるか、ふんどしを締めるかです。どちらも布が体から浮く。私は、浮かない物が欲しいんです。体に沿って、隠さない下着です。縫うのはあなたで、型もあなたです」

「僕が、型」

「細身の人の寸法が要ります。商会の縫い子は、皆、体が厚い。あなたの寸法で型を起こして、あなたが縫う。代は、お店の借りから引いておきます」

　小浜の膝から練習布が落ちた。環はそれを拾って膝に戻してやり、帳場の引き出しを開けた。使いこんで端のほつれた巻尺を出す。

「奥で測ります」

「わけを聞かないんですか」

「聞いても、寸法は変わらない」

　巽の口の端がわずかに持ち上がって、牙がもう少しのぞいた。

「自分の寸法は、自分じゃ取れない。会頭が当ててください」

「荷の幅なら、毎日測ってきました。目盛りは読めます」

「小浜、帳面を出して。会頭が言う数を、ここで書いて」

「は、はいっ。客の帳面でいいですか」

「いい。新しい欄を開けて」

作業場を抜けた奥が、試着室になっている。布ののれんが一枚下がっているだけで、戸は無い。壁に姿見が一枚立ててある。店先とは板の仕切りで分かれていて、仕切りは耳の高さまであるから、小浜の座る帳場から奥は見えない。声だけが届く。

環は帯を解いた。着物を衣桁に掛け、じゅばんも脱いで重ねる。腰布は外さなかった。自分で縫った物で、股上を深く取り、前に布をたっぷり余らせて畳みこんである。立っても座っても、前のふくらみの有る無しは分からない。

巽が背に回った。巻尺が肩に当たる。それを押さえる指の背が首の付け根にふれて、環の黒い耳が後ろへ倒れた。冷たい。

「冷えますか。私の手は、夏でもこうです」

「布が冷たいのと、変わらない」

「肩幅、一尺四寸」

　巽が仕切りのほうへ声を張った。

「はい」

　仕切りの向こうで、小浜の筆が紙をこする音がする。

　巻尺が脇の下をくぐって、胴に回った。平らな胸の下で、目盛りが合わされる。巽の指は布の端を押さえるだけで、肌の上を滑りはしない。

「胴、二尺二寸」

「はい」

「腰、二尺六寸」

「はい……あっ」

　小浜の声がはねた。

「師匠、かがり糸、さっきので最後の束でした。糸屋さんが閉まる前に行ってきてもいいですか。明日の朝の練習ができなくなっちゃう」

「行って。帳面は置いていって。あとは僕が書く」

「すぐ戻ります！」

　草履の音が店先を抜けて、表ののれんが鳴った。

「次は股です。ほかの店でも股下は取りましたが、どこも着物の上から当てるだけでした」

　巽が巻尺の端を差し出した。

「へその下で、端を押さえていてください。後ろから通します」

環は右手で端を受け取って、腰布の上から下腹に当てた。巽が後ろでしゃがむ気配がする。巻尺のもう一方が尻の下からもものあいだへ入ってきた。冷たい指の背が、内ももの柔らかい所にふれる。

環の左手が、前へ抜けてこようとする巽の手首を、腰布の手前で押さえた。右手は巻尺の端を下腹に当てたままだった。

巽の手が止まった。押さえている環の指を見て、それから腰布の縫い目に目を移す。

「これは、あなたが縫った腰布ですね。目が細かい」

環の指は、手首から離れなかった。

「職人は、自分の縫った物を人にいじられるのを嫌がります。商会の縫い子もそうです。崩したくないなら、腰布の上から当てましょう」

環は手を離した。

巻尺が腰布ごと股をくぐって、前へ出てきた。巽が後ろの端を引き、目盛りを体に沿わせていく。前に余らせて畳んだ布が、張った巻尺に押されてつぶれた。布の下にあるはずの丸みに、巻尺はどこにも引っかからない。目盛りはそのまま奥へ沈み、腰布ごと股の割れ目へ平たく食いこんで止まった。

後ろで、巽の手が動かなくなった。

やがて巻尺がゆるんだ。巽は何も言わずにそれを外し、手の中で巻き取った。

「結び目だけ、ほどいてもらえますか。下着を縫うなら、下着の下を測らないといけません」

　環は巻尺の端を握ったまま、左手を腰の結び目へ回した。毎朝自分で結んでいる結び目だ。端を引けばひと息でほどける。ゆるんだ腰布がずり落ちかけたのを、左手が下腹で押さえて止めた。前に垂れた布の重なりが、へその下からももの付け根までを、まだ隠している。

「端を、もう一度」

　巽が背に回った。尾の付け根のわきから、今度は腰布の下へ、巻尺がじかに肌を伝って入ってくる。冷たい布が尻の割れ目をなぞって、もものあいだを抜けた。前へ出てきた端

を、環は右手で受け取って、腰布の上からへその下に押し当てた。

巽が後ろの端を引いた。

張った巻尺が、腰布の垂れた前を内側から押し分けた。押さえている左手の下で、布が左右に割れる。割れた布のあいだに、墨の目盛りが一本、まっすぐ下りていた。目盛りはまんこの溝に沈んで、閉じた肉を両わきへ押し広げ、その上の端で、皮をかぶったクリの上を通っていた。

「鏡を見なさい。目をそらさないで、自分で見なさい」

環はあごを上げた。姿見の中に、自分が立っている。左手は腰布を握ったまま下腹に貼りつき、右手は巻尺の端をへその下で押さえ

ている。そのあいだで、腰布が左右へ割れて、使いこんだ巻尺が割れ目に食いこんでいた。張った布の両わきから、閉じきれない肉がはみ出している。男のものが下がっているはずの所には、何も無い。

目盛りの墨が、少しずつにじみはじめていた。

巽は環の真後ろに立ち直していた。左腕は環の腰の後ろへ回ったまま、尾の付け根で巻尺のもう一方の端を押さえている。右手が前へ来た。腰布の割れ目に差しこまれた人さし指と薬指が、まんこの両わきの肉を、巻尺をはさんだまま外へ押し開く。開いた中は肌より濃い色をしていて、薄くまん汁で光っていた。中指の腹が、巻尺の上からクリを押さえた。

冷たい。

環は息を止めた。

「毎朝、この結び目を結んでから店を開けていたんですね」

巽の声は、耳のすぐ上から聞こえた。

「隠さない物を縫ってくれと頼んだ人の、隠していた所を、私は今見ています。……まだ、見ていたい」

押さえた指は動かない。冷たさだけが布を通って沈んでくる。皮の下で、クリがその冷たさを押し返すように固くなっていく。環の喉が鳴りかけて、止まった。

「端は、離さないで」

「離さない」

　中指の腹が、巻尺の布ごと、クリをゆっくり押し回した。目盛りの細かなでこぼこが、布越しにクリの頭をこすっていく。ひと回りして止まり、また逆へ回る。

「っ」

　環の右手の中で、巻尺の端がよじれた。握り直す。離したら、巻尺はたるんで割れ目から外れる。外れたら、この手は何も持っていないことになる。左手は腰布を握りしめたまま、指の節が白い。

「僕は、測られてるだけだ」

「ええ。そのままでいてください」

　中指は押してこなかった。乗っているだけなのに、重い。

腹が浅く上下した。息を止めているので、胸は動かない。へその下だけが固くなっていく。ももの内側に力が入る。巻尺が張って、割れ目の奥へもう少し沈んだ。

「ふ……っ」

鼻から息がもれた。もらしたくなかった音だ。環は奥歯をかんで、鏡の中の自分の目をにらんだ。黒い耳が、両方とも頭に貼りつくほど倒れている。

巽の指は急がなかった。押し回しては止め、止めてはまた回す。冷たかった指の腹が、環の熱を吸って、少しずつぬるくなっていく。ぬるくなった分だけ、ふれている所の形がはっきりした。クリの皮がめくれて、むき出しになった先が、目盛りの布にじかに当たる。人さし指と薬指は、そのあいだも割れ

目を開いたまま動かない。開かれた奥から、まん汁が巻尺へ伝っていく。

「ぐ……」

歯のあいだから、濁った音がこぼれた。

「環さん」

呼ばれて、環は鏡の中の巽を見た。巽は環の顔を見ていなかった。鏡に映った環の股を、まばたきもせずに見ている。牙ののぞく口の端から、細い息が出入りしていた。会頭の顔ではなかった。欲しい物を前にして、まだ手を出しきれずにいる男の顔をしていた。

中指が、むき出しのクリの上で、巻尺ごと小さく強く円を描いた。

腹の奥でこらえていたものが切れた。

膝が落ちた。落ちかけた体を、腰の後ろにあった巽の左腕が受け止める。環の尾が跳ね上がって、巽の脇腹を打った。息は止めたまま、声も出ない。まんこの奥が、張った巻尺をかむように何度も縮み、そのたびにももが寄ろうとしては、巽の手に止められる。押さえつけられたクリの下から、まん汁があふれて、目盛りの布へじわじわと染みていく。

右手は、巻尺の端を離さなかった。左手も、腰布を握ったままだった。

巽の中指は、最後の震えが引くまで、クリの上で動かずにいた。

環はしばらく、巽の腕に腰を預けたまま立っていた。脚が自分のものに戻ってくるのを待って、膝を伸ばす。右手を開くと、巻尺の端に爪の跡がくっきり残っている。

巽が後ろの端を放した。巻尺が割れ目から抜けて、だらりと垂れる。股をくぐっていた所の目盛りだけが、ぬれて色が濃い。巽の指先も、同じようにぬれて光っていた。巽はその手を握りこんで、ふかずに下ろした。

環は腰布を結び直した。ほどいたときと同じ所で、同じように結ぶ。じゅばんを取って肩に掛け、その袖で巻尺をふいた。手がまだ震えて、ふくたびに布がよじれる。ふき終えると、巻尺を首に掛けた。

「次は会頭を測ります」

巽が環を見下ろした。

「下着の見本なら、商会の主の寸法も要る。羽織を脱いで、前を開けてください」

「私の、ですか」

「商会が売る物を、商会の主がはけないのは困る」

巽は羽織を脱いだ。環はそれを受け取ろうとして、手を止めた。

肩の縫い目の糸が擦れて、白っぽく毛羽立っている。襟を返すと、裏の縫い代が多めに残してあった。縫い代の端を寝かせずに、一度折ってからくけてある。自分の癖だ。

「この羽織は、つるしじゃない」

「ここで縫ってもらいました。先代が倒れたあとの冬に。測ったのは、あなたです」

「……縫い代を多めに残した。会頭の肩は、まだ厚くなると思ったから」

環は羽織を衣桁に掛け、隅の踏み台を巽の背の後ろへ引き寄せた。台に上がっても、目

の高さはようやく巽の肩に届くくらいだ。首の付け根から、肩先へ巻尺を渡す。着物の上からでも、背中の硬さが手に伝わってきた。うろこの浮いた皮膚が、肩の下で厚く盛り上がっている。

「厚くなってる」

　巽の着物の襟を肩から落とさせて、じかに巻尺を当てた。背中は冷たかった。指でふれると、皮膚が石のように硬い。肩甲骨のふちに沿って、うろこが小さな瓦のように重なって並び、その上を巻尺が渡ると、目盛りの布がかすかに引っかかった。

「つるしは、どこの店でも肩でうそをつく」

　環は巻尺を肩先から肩先へ渡した。

「詰めた分を縫い代に寝かせて、着た日だけそれらしく見せる。何日かすれば襟が浮く。浮いたのを見て、客は自分が太ったと思う。……会頭の背中は、そのうそをつかせる幅がない。肩先から肩先まで、どこにも逃げ場がない厚さで、まっすぐ張ってる。だからつるしを詰めると、背中が足りなくなって前が開く。開いたのを、店は裾を足してごまかす。裾を足したって、背中は足りないままなのに。この背中につるしを売る店は、目が悪い。肩がいい。つるしじゃ合わない」

巽の太い尾が、床板の上でゆっくり一度だけ動いて、板をこすった。

「仕立て屋に、自分の背中をほめられたのは初めてです。どこの店も、大きすぎると言いました」

「大きいのは悪くない。布が足りないのは、店の都合だ」

「では、私の着物の布は、いつも店の都合で足りなかったわけですね」

「……今度のは、足りる」

　環は踏み台を下りた。巽の前へ回ると、帯の下で着物の前が持ち上がっていた。布が突っ張って、合わせ目が割れかけている。環は帯の結び目に手をかけた。

「解きます」

　巽は両手を下げたまま、環に帯を解かせた。着物の前が割れる。下帯の脇から、太いちんぽが反り返って突き出ていた。根元から先まで太い筋が浮き、先は濃い色に張りつめて、先走りで光っている。下帯の布に押し上

げられて、重たげな金玉が片側に寄っていた。

　環は膝をついた。目の前に、ちんぽがある。目はそらさなかった。

「股下から」

　巻尺の端を巽の股の付け根に当て、くるぶしまで下ろす。読んだ目盛りは口に出さず、頭に入れた。膝の下の骨は太く、ふくらはぎの肉は冷たくて硬い。くるぶしのわきにも、うろこが小さく浮いていた。

「目を、そらさないんですね」

「そらしたら、目盛りを読み違える。……ほかの店は、そらしたんですか」

「どこの店でも、ここで仕立て屋の目がよそへ行きました。巻尺だけ当てて、天井を見な

がら読むんです。だから、どの着物も股がきつかった」

「天井に寸法は書いてない」

　巻尺をももに回す。ももは環の腰ほどの太さがあった。付け根に巻尺をくぐらせるたびに、ちんぽが環の頬のわきで跳ねて、先走りが頬に冷たく当たった。

「下着を縫うなら、包む物の寸法も要る」

　環は下帯の結び目をほどいた。布が落ちて、重たい金玉がだらりと垂れ下がる。巻尺の端をちんぽの根元、金玉のすぐ上の付け根に当て、裏の筋に沿って先まで目盛りをはわせた。先の割れ目からにじんだ先走りが、巻尺の端をまたぬらす。

「……環さん」

「長さは取った。次は太さ」

「仕立て屋に、ここを測られたのは初めてです」

「下着の注文を出したのは会頭だ。包む物の寸法を取らずに、袋は縫えない」

　巻尺をちんぽに巻く。中ほどのいちばん太い所で目盛りを重ね、親指でひと目押さえて、すぐにほどいた。巻いた布の内側で、ちんぽが脈を打っていた。読み終えた目盛りを頭に入れ、巻尺を外して、今度は根元に回す。重ねて、読んで、外す。くびれの下でも、同じことをした。巻尺が離れるたびに、ちんぽは環の目の前で上下に揺れ、先から垂れた先走りが、糸を引いて床へ落ちた。

巽の左手が、頭の上のはりをつかんだ。右手は姿見の枠を握っている。どちらの指の節も白くなっていた。

「金玉も測る。袋の深さが決まらない」

環は左の手のひらを、金玉の下に添えた。載せると、ずしりと重い。冷たい体の中で、金玉だけが熱かった。手のひらの上で、金玉がきゅっと縮み上がる。環は右手で、巻尺を金玉の付け根から袋の底まで下ろし、目盛りを読んで、手のひらを離した。

「環さん、私は」

巽が言いかけて、はりをつかむ指に力を入れた。はりが、指の下できしむ。ちんぽの先がふくらんで、先走りがまたひと筋、床まで垂れた。

　環は巻尺を首に掛け直して、膝をついたまま巽を見上げた。

「……測り終わりました」

　巽は長いあいだ、はりから手を離さなかった。肩が大きく上下している。牙の先が下の唇をかんで、白いくぼみを作っていた。やがて指をはりからはがし、床に落ちた下帯を拾って、立ったままのちんぽの上から締め直した。締めた布が、まだ突っ張っている。帯を結び、衣桁から羽織を取って肩に掛けた。毛羽立った肩の縫い目を、環の目が追った。

「型を起こしたら、知らせてください。私が取りに来ます。使いはよこしません」

「届けます。会頭の店まで」

「来なくて結構です。ここへ来る用を、私は自分で持っていたい。……羽織の直しも、急ぎません」

巽はそう言って、かもいの下を背を丸めてくぐっていった。

表ののれんが鳴った。

「戻りましたー。糸屋さん、藍のかがり糸が売り切れで、茶色しかなくて。試験って、糸の色まで見られますかね」

「見られない。目がそろってるかどうかだけだ」

「よかったあ。茶色って、なんだか地味じゃないですか。せっかくの試験なのに」

「地味な糸のほうが、目の乱れが目立たない。でも、試験官は糸の色じゃだまされない」

「じゃあ、やっぱり練習あるのみですね。……あれ、会頭さん、もう帰っちゃったんですか」

「帰った」

「すっごく大きかったですね。うちののれん、破れるかと思った」

　小浜は帳場に戻り、茶色の糸を針に通しはじめた。

「師匠、さっきの寸法の続き、私が書いておきましょうか」

　環は帳面を取って、作業場へ持っていった。

「下着の寸法って、何を測るんですか。私、ふんどしの寸法なんて取ったことないです」

「はく人の体を全部。布が浮かないように」

「全部かあ。会頭さんだったら、肩だけで巻尺一本使いそうですね」

「使った」

「私、試験に受かったら、ああいう大きいお客さんの採寸もやらせてもらえますか。踏み台に乗って」

「受かったらな。まず穴の目をそろえろ」

「はあい。……茶色の糸、思ったより目がきれいに見えます。師匠、見て」

　環は作業場から首だけ出して、練習布をのぞいた。右の端の目が、まだ少し太っていた。

「右の端。また指が先に行ってる」

「ええー」

その夜、板戸を下ろしてから、環は作業台に灯を寄せた。

帳面は閉じたまま、引き出しにしまってある。開かなくても、寸法は頭に入っていた。紙を広げて、下着の型を引く。前と後ろ。尾の付け根の逃がし。まんこの縁に縫い目を当てない切り替え。線を引くたびに、巻尺の冷たさと、巽の中指がクリの上で止まっていた重さが、ももの内側に戻ってきた。環は筆を置かず、最後の線まで引いた。

型を切り抜いて、白い絹の上に置く。文鎮で隅を押さえる。

巽の羽織の肩の毛羽立ちが、灯の下で一度だけ目の奥に浮かんだ。直すなら、同じ色の糸がまだ棚の奥にある。

環ははさみを取った。刃を開いて、絹の端に当てる。

しゃき、と最初の音が、閉めた店の中に響いた。

第02話

板戸を上げる前の店は、作業場の灯だけがついていた。環は試着室の姿見の前で、着物を脱いだ。腰布もほどいて、衣桁に掛ける。作業台から薄紙の包みを取って開くと、白い絹が出てきた。幾晩かかけて縫った仮縫いだ。腰の後ろでひもを結ぶ形で、前は一枚の薄い絹が下腹を覆う。股の所だけ切り替えてあって、布が左右に分かれ、まんこの割れ目に沿って細く開いている。

足を通して、腰の後ろでひもを結んだ。切り替えの開きが、割れ目の上に重なる。

姿見を見た。

白い絹の真ん中で、開きのあいだから、まんこの縁がのぞいていた。前に布を余らせて

いない腰が、細いまま映っている。

　環はひもを引いた。絹を足から抜いて、薄紙に包み直す。腰布を結び直し、着物を着て帯を締めた。

　表ののれんが鳴った。

「おはようございまーす。師匠、もう起きてたんですか」

「起きてた。茶色の糸、昨日の続きはかがったか」

「かがりました！　ゆうべ、山ひとつ分。指の先、見てください。糸で切れちゃって」

　小浜は人さし指を突き出した。

「引くとき、糸を指に巻くからだ。巻かずに、指の腹で押さえて引け」

「押さえて、引く……。試験の日までに、指の皮、厚くなりますかね」

「厚くならなくても、引き方が変われば切れない」

　小浜は帳場に風呂敷を広げ、ゆうべ縫い上げた喪服を畳みはじめた。

「お寺の奥さん、今日の昼の法事に着るんですって。ご主人のじゃなくて、ええと、おしゅうとめさんの」

　小浜は風呂敷の角を結びかけて、手を止めた。

「師匠、襟のところ、やっぱり一回見てもらえますか。ゆうべ、くけ目が一か所だけ浮いてる気がして」

　環は襟をめくった。くけ目は、どこも浮いていない。

「浮いてない。指でさわりすぎて、そう見えるだけだ」

「よかったあ……お寺の奥さん、目が厳しいんです。前に、ほかの店の喪服を、袖を通す前に突き返したって」

「突き返されたら、持って帰ってくればいい」

「持って帰りたくないです。私が縫ったって分かったら、奥さん、もう一回最初から見るに決まってます」

「見られて困る所は、縫ってないだろう」

　小浜は風呂敷の角を固く結び、両腕に抱えた。

「昼には戻ります。帰りにお寺の門の前のおだんご、買ってきてもいいですか」

「いい。お代は棚の小箱から」

　表ののれんが鳴って、草履の音が遠ざかった。

　巽は昼の鐘より少し早く来た。のれんをくぐるときの背の丸め方が、この前より小さい。かもいの高さを覚えたらしかった。

「お一人ですか」

「見習いは、お寺に喪服を届けに出てる。昼には戻る」

「では、昼までに済ませましょう。……店先の札は、出しておきますか」

「出さない。今日は誰も来ない日だ」

「来ない日が分かるんですか」

「雨の次の日は、誰も仕立てを頼みに来ない。みんな、ぬれた物を干すのに忙しい」

「それなら、今日は誰にも聞かれずに済みますね」

　巽は作業台の上の薄紙を見た。

「型紙を見せてもらえますか」

　環は作業台の引き出しから、紙の型を出して広げた。巽は太い指で紙の縁をなぞった。

「後ろが、前より長いんですね」

「尾があるから。尾の付け根で布が引かれると、前が上がる。上がった分を、後ろで足した」

「商会では、尾のある客にも、尾の無い客と同じ型を使います。尾の所だけ穴をあけて」

「穴をあけたら、穴の縁から裂ける」

「ええ。だから、尾のある客は皆、つるしの下着をすぐに買い替えます。商会は、それでもうかっている」

巽は型紙を畳んで、環に返した。

「もうからなくて構いません。着てください」

環は試着室に入って、帯を解いた。着物を衣桁に掛け、腰布もほどいて落とす。さっき包み直したばかりの仮縫いを取り、もものあいだから引き上げて、腰の後ろでひもを結んだ。結び目は、いつも自分の腰布を結ぶのと同じ所に来る。

巽が羽織を脱いで衣桁の端に掛け、試着室に入ってきた。環のまわりを一度ぐるりと回り、それから膝をついて、目の高さを下腹の前まで下ろした。

「ここで縫い代を倒したのですか」

「擦れるから、外へ」

「どこの下着も、縫い目は内側にあります。外へ倒すと見た目が悪いと、商会の縫い子は言います」

「見た目より、擦れないほうがいい。はく人の肌は、縫い子の目より長く布にさわってる」

　巽は立ち上がると、作業台の霧吹きを取ってきた。布のしわを伸ばすのに使っている物だ。

「待ち針の前に、湿らせます。乾いた絹は、肌の上で滑る」

　環が口を開くより先に、霧が腰に吹きつけられた。冷たい粒が絹に染みて、布が肌にべたりと貼りつく。腹、脇、ももの付け根。ぬ

れたところから絹が透けて、肌の色がにじみ出てきた。

「っ……」

　仮縫いで霧を先に吹く仕立て屋はいない。環は息をのみこんで、黙って腕を体の横に下ろした。

　巽は懐から小さな針山を出した。手首に巻く形の、使いこんだ物だ。針山にはびっしりと待ち針が刺さっていた。

「布を、肌に添わせて留めます」

　指が脇の下に入り、湿った絹の端をつまんで、肌の上でぴんと張った。待ち針が絹を刺し、その先が裏の布と縫い代を拾って、また表へ出てくる。針先は肌に刺さらない。刺さ

らないが、布が肌に張りついているぶん、息をするたびに先が肌にふれた。

「ん……」

腰の横にも。ももの付け根の、仮縫いの裾が肌に回りこむ所にも。巽が針を打つたびに、布が体に吸いつき、動ける幅が狭くなっていく。

巽の手が、後ろへ回った。尾の付け根で、絹の縁を寄せる。

「尾が、布の上に乗っています。どけてもらえますか。私の手は、どちらも布でふさがっている」

環は右手を後ろへ回して、自分の尾をつかんだ。付け根から少し先を握って、横へ持ち上げる。尾を上げると、尻の割れ目が引かれ

て開き、仮縫いの後ろの布がケツ穴の上でぴんと張った。巽の指が、その張った布の縁を尾の付け根に添わせて、針を入れる。針の玉が、尾の付け根の黒い毛のあいだに埋まった。

「離さないで。尾が落ちると、針が倒れます」

　環は尾を握ったまま、尻の割れ目が引かれて開いているのを、肌で感じていた。握った所の先で、尾の先が丸まろうとする。丸まると付け根が引かれて、針の先が毛の下の肌にふれる。環は手首を返して、尾の先をまっすぐ伸ばした。

　巽は尾の付け根の反対側にも針を打った。打ち終えてから、背を起こした。

「もう、下ろしていいです」

環は尾を下ろした。付け根の両わきで、針の玉が黒い毛を押さえていた。

「動かないで。針が刺さっているあいだ、あなたは布です」

環は鏡を見た。湿った白い絹が、細い腰にしわもなく張っている。待ち針の玉が、赤や青や黄色の粒になって、脇と腰と、ももの付け根に並んでいた。どの針の先も、肌には刺さっていない。

「縫う前の寸法は、あなたの手が取った物です。私は張っただけです」

「張ったなら、動いて見ないと。立ってるだけの下着はない」

「では、動いてください。針が当たらない幅で」

環は膝を少しだけ曲げた。腰を落とすと、ももの付け根の布が引かれて、切り替えの開きが割れ目に食いこむ。張った絹の縁が、まんこの両わきの肉を左右へ押し分けた。ももの針の先が、肌の上でちくりと立つ。環は息を詰めて、その高さで止まった。

巽は膝をついたまま、環の股の下をのぞきこんでいた。

「浮きませんね。布が、あなたの腰から一度も離れない。そのまま、歩いてみてください」

環は前へ足を出した。踏み出したももが布を引き、切り替えの縁が割れ目の中でずれる。もう片方の足を出すと、ずれた縁がクリの皮の上をこすった。

「ぅ……」

その次の足は出なかった。鏡の前で、片足を浮かせたまま止まった。浮かせた足の指が、床の上で丸まる。

「歩くたびにあなたがその顔をする下着なら、私は一枚欲しい。商会の見本でなくていい」

環は浮かせた足を下ろした。下ろしたときにも、縁がもう一度、クリの上を通った。

巽は針山を外し、作業台の上のチャコを取った。白い板のふちを親指で削って、角を立てる。

「切り替えの線を、肌に引きます。布の上からでは、どこで替えるのか私には見えない」

巽が切り替えの開きに指をかけて、左右へ広げた。割れ目が、布のあいだからむき出し

になる。チャコの角が、クリの上に当たった。

　冷たくはなかった。乾いて、ざらついていた。チャコは皮の際をなぞって、クリのまわりを丸くひと巡りした。白い線が、肌の上に細く残る。

「っ……」

　チャコが離れた。次は割れ目の縁だ。上の端から、閉じた肉の外側をなぞって、下へ下りていく。ざらついた角が、柔らかい所をこすっていく。下の端まで来ると、反対側の縁を、今度は下から上へ。チャコの粉が、薄い毛の上に白く散った。

「これで、裁てますか」

環は鏡の中の、白い線で縁取られたまんこを見た。クリのまわりには、白い輪がある。輪の中で、クリが皮から頭を出しかけていた。

線は、縁に寄りすぎていた。

環は黙って、巽の手からチャコを取った。

巽は指で開きを左右に広げたまま、待っていた。環は鏡を見ながら、自分の割れ目の縁に、チャコの角を当てた。ざらついた角が、自分の手で縁を下りていく。巽の指で開かれたぶん、角は閉じた所よりも内側の、ぬれた肉の際をこすった。粉が湿って、角が引っかかる。引っかかるたびに、腰がわずかに逃げる。逃げると、ももの付け根の針が肌を突いた。

「ふ……っ」

線が途中で一度はねた。環は角を当て直して、はねた所の上から、もう一度ゆっくり引いた。

反対側の縁も、同じようにした。最後に、巽の引いたクリのまわりの輪の、さらに外側を、ひと回り大きくなぞる。チャコの角がクリの皮の上を通ったとき、指先が震えて、白い粉がクリの頭にこぼれた。

環はチャコを巽に返した。巽は受け取ったチャコを握ったまま、開いていた指をそっと離した。

巽がまた霧吹きを取った。霧吹きの口が、下へ向いた。

開きのあいだで、霧がクリに当たった。

「ひっ」

腰が逃げようとした。脇の待ち針が、肌に先を立てた。ももの付け根の針も、同時に刺さりかける。環は息を止めて、腰を戻した。

霧がもう一度吹いた。クリに、チャコの白い輪に、割れ目の縁に。チャコの線が水を吸って、輪郭がほんの少しぼやけた。冷たい粒が割れ目の中を流れて、奥へ伝っていく。まん汁と混ざって、どこまでが霧なのか分からなくなった。

環の膝が、細かく震えはじめた。止めようとすると、ももの付け根の針が肌にふれる。膝の震えがももに上がり、腰に上がって、脇の針まで揺れた。

巽が霧吹きを置いた。自分の右手を見て、それから環の震えるももを見た。

「私の手は冷たい。冷たい指でさわられたら、誰でも震えます」

巽は試着室を出た。作業台の針箱を開けて、指ぬきを取り、右の中指にはめる。それから、作業台のわきの火鉢の前にしゃがんだ。火鉢には、火のしが掛けたままになっている。巽はその上に、両手をかざした。長いあいだ、そうしていた。手の甲のうろこが、火の色を映して赤く光った。

戻ってきた巽の手は、温かかった。左の手のひらが、環の腰の後ろ、結んだひもの上に添えられる。それだけで、ひもの下の肌がじんわりと温まった。右手の中指が、開きのあいだに入ってきた。

　指ぬきの、細かいくぼみの並んだ腹が、クリに当たった。

「あ゛……っ」

　温かい金属が、霧で冷えたクリの上で、ぴたりと止まっている。逃げようとした腰を、後ろの手が支えた。前へ出れば指ぬきに押しつけられ、引けば脇の針とももの針が肌を突く。

　指ぬきが、クリをゆっくり押しつぶした。くぼみの一つひとつが、むき出しの先に当たっては離れる。押して、離して、指の腹を転がすように回す。チャコの白い輪の上で、指ぬきが円を描いた。

「ん゛、ふ……ぐ、う゛……っ」

「まだ、震えていますね」

巽の指は止まらなかった。

「震えてるのは、針のせいだ」

環は鏡の中の自分を見たままだった。

「布が肌に張りついてると、少し動いただけで先が当たる。だから、脇の針が当たらないように、肩を、下げてると、もものほうへ、力が、逃げて、ももの針が、刺さりそうになるから、そっちも、こらえて、そうやって、あちこち、こらえてるのが、膝に、出てる。だけ、だ。会頭の手が、冷たいとか、温かいとか、そういうのは、関係……っ、う゛、あ……」

指ぬきが、クリの根元へもぐりこんで、下から持ち上げた。

「冷たいほうが、まだ、よかった」

巽の指は、温かいまま、引かなかった。

「私は、あなたが震えずにさわらせてくれる手になりたかった」

「……ぐ、う゛……」

「引きません。温めた手のほうが、あなたの顔がよく見える」

環は鏡を見た。口が閉じない。黒い耳が両方とも頭に貼りつき、鼻の頭まで赤い。開きのあいだで、巽の太い指が、指ぬきごとクリをこねていた。

腰を引けば針。前へ出れば指。体の置き場がどこにもない。

「ひ、ぐ、あ゛、あ゛……っ」

指ぬきが、クリの上でぐっと押しこまれた。

腹の奥から何かがせり上がってきた。止める間もなかった。開きのあいだから、透明な潮が噴き出して、巽の手首を打った。一度で終わらず、腰が跳ねるたびに続けて噴き出す。腰が跳ねると針が肌を突き、肌を突かれた驚きでまた腹が縮んで、新しい潮が押し出された。仮縫いの白い絹が、前からみるみる透けていく。チャコの線が流れて、白い筋になってももを伝った。

環の尾が跳ね上がり、姿見の横の壁を打った。

「あ゛、う゛ぅ、ひ、ぐ……っ」

潮が止まるまで、巽の指ぬきはクリの上から離れなかった。押してはいなかった。温かいまま、クリの上に置かれていた。

環は立っていた。膝はがくがくと揺れていたが、後ろの巽の手と体じゅうの待ち針のせいで、どちらへも倒れられなかった。仮縫いの前は、腹からももの付け根までぬれて肌に貼りつき、布の下の肌の色も、割れ目の形も、透けて見えていた。チャコの白は、もうももの上の筋にしか残っていない。

巽が、脇の待ち針を抜いた。続けて腰の針を抜く。抜くたびに、張っていた布が少しずつゆるむ。ももの付け根の針に手をかけたところで、巽の手が止まった。

巽は自分の帯を解いた。着物の前を割る。ちんぽが、下帯を押しのけて、もう反り返っていた。

巽は環の後ろで膝を折り、腰の高さを合わせて引き寄せた。ちんぽの幹が、もものあい

だから前へ差しこまれる。ぬれた絹の開きに沿って、幹がまんこの割れ目を下から押し上げた。布の切り替えの端と端のあいだに、ちんぽがはさまる。

「う゛、ぁ……っ」

巽が腰を引いた。幹が割れ目をこすって後ろへ下がる。押しだす。切り替えの縁ごと、幹がまんこを下から押し上げる。ぬれた絹が幹にまとわりついて、布ごと割れ目をこすっていく。ももの付け根に残った待ち針の玉が、幹の横腹に当たって、かち、と小さく鳴った。

巽の左手は環の腰のひもを握り、右手は環の下腹を、仮縫いの上から押さえていた。前へ逃げることも、後ろへ逃げることもできない。

巽の息が、耳の後ろで荒くなった。腰が速くなる。押し上げられるたびに、絹の縁がクリの皮をめくって、またかぶせる。環は腰を引こうとして、針に止められた。前へ逃げようとして、下腹の手に止められた。逃げる代わりに、つま先が床から浮いた。かかとを上げたまま、鏡の前で、もものあいだを太いちんぽが行き来するのを見ていた。先から垂れる先走りが、潮でぬれた絹の上に、別の筋を引いていく。

さっき潮を噴いたばかりの所が、また腹の奥で縮みはじめた。

「ふ、ぐ、う゛……っ、ん゛……っ」

巽の手が、環の下腹に強く押しつけられた。ちんぽの先が、仮縫いの前布の内側へもぐりこむ。布と肌のあいだで、ザーメンが噴

き出した。熱い。ぬれた絹の下を、ザーメンがへそのほうへ広がっていく。次の脈で、布の外へもあふれて、切り替えの縁から白く垂れた。環の腹の奥で、また小さく何かが縮んで、もものあいだから潮がひと筋こぼれた。浮いていたかかとが、床に落ちた。

巽が、長く息を吐いた。もものあいだからちんぽを引き、環の腰から手を離す。

「縫い直しですね。この絹は、もう張りが戻らない」

「戻らなくていい。次のを縫う」

環は鏡を見ていた。仮縫いの前は、潮で透け、ザーメンで汚れて、チャコの線はどこにも残っていない。それでも、縫い代を外へ倒

した縫い目だけは、どこもゆがまずに、腰をぐるりと巡っていた。

巽が、ももの付け根に残った待ち針を抜いた。最後の針を針山に戻して、巽は自分の着物の前を合わせた。そのまま、汚れた絹の上の縫い目を、指の背でなぞった。

「縫い目を隠さない。肌に当たる所だけ逃がして、あとは全部、外へ出している。隠さない縫い方を、あなたはもう覚えた」

環は鏡から目を離さなかった。

「針は、布を留めるだけでした。どこも刺していません」

「分かってた。打たれたとき、先が肌の上で止まるのが分かった。……会頭は、待ち針を打つのに慣れてる」

「荷揚げのころ、破れた帆を自分で繕っていました。帆布は待ち針では留まらないので、太いくぎで」

「帆と絹じゃ、針の入れ方が違う」

「違いました。最初に絹へ打ったときに分かりました」

「次は、もっと薄い絹にする。今のは張りが強すぎる」

「透けますよ」

「透けても、浮くよりいい」

　環は自分でひもをほどいた。汚れた仮縫いが、ももを滑って床に落ちる。腰布を結び直し、着物を着た。帯を締めてから、床の仮縫いを拾い上げた。

　巽は衣桁から羽織を取って、肩に掛けた。

「型は、さっきあなたが引き直した線で起こしてください。その仮縫いは、洗わずにおいてもらえますか。次に来たとき、もう一度見たい」

「乾いたら、しわになる」

「しわのまま、置いておいてください。縫い直したのと並べておきます」

「並べたって、見本にはならない」

「見本にはしません。私の手もとに置くだけです」

「……裏に干しておく。風に当てないと、絹が黄ばむ」

「それで結構です」

　巽はそれだけ言って、のれんを背を丸めてくぐっていった。

　環は試着室の衣桁の前で、仮縫いを広げた。丸めずに、しわを手で伸ばす。ぬれた絹は手のひらに貼りついた。身頃を合わせて、ひもを中へ入れ、前布が上に来るように畳む。畳むと、透けた所とザーメンの白い跡が、ちょうど表に出た。環はそれを裏返さなかった。

　表ののれんが鳴った。

「戻りましたー！　奥さん、襟を指でなでて、何にも言わずに受け取ってくれました。何にも言わないって、いいってことですよね。おだんご、みたらしとあんこと、両方買ってきました」

「いいってことだ」

「やったあ。お寺の門のところで、お経の練習してる小僧さんがいて、ずっと同じところでつかえてるんですよ。あれ、試験の私とおんなじだなあって思っちゃって」

「つかえたら、つかえた所からもう一度読めばいい」

「師匠、それ、ボタン穴のときも同じこと言いました」

「同じことだ」

「あ、それと、お寺の奥さんが、師匠の縫い目はおとなしいねって言ってました。それ、ほめてるんですか」

「ほめてる。おとなしい縫い目は、着た人より先に目立たない」

「へえ……じゃあ私の穴も、おとなしくなるように頑張ります。……師匠、お茶いれますね。あ、風呂敷、干しておかないと。お寺の奥さんの家、お線香のにおいがすごくて、うつっちゃいました」

　小浜の足音が、仕切りの向こうで止まった。環は仕切りの端まで行き、板と柱のすき間から、畳んだ仮縫いを差し出した。

「これも。水に浸けないで、そのまま裏で干しておいて」

「はーい……」

　小浜の両手が、すき間から伸びて、仮縫いを受け取った。受け取った手が、すき間の向こうで止まった。ぬれた絹は、手にずしりと

重い。風呂敷の線香のにおいの下から、別のにおいが上がってきた。

小浜は仮縫いを両腕に抱え直し、風呂敷と重ねて、裏庭へ出ていった。

裏庭の物干しざおに、紺の風呂敷が広げて掛けられた。その隣に、洗っていない白い絹が、ぬれた所を下にして掛けられた。昼の風が吹くと、風呂敷と絹がそろって揺れた。風呂敷からは線香のにおいが抜けていき、絹は日に透けて、白い筋だけが表に浮いて見えた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名　仕立て屋、会頭に仮縫いの待ち針を打たれたまま潮を噴く

サークル　もふもふといっしょ！

発行日　2026・10・14

レーティング　R18